

探訪 チャレンジ企業 52

「立地を変える／小売業の決断」 有限会社オザキ 野々市印房：野々市町

注目スポットへの出店

野々市町三納地区は平成十七年に町役場が新築移転し、十八年に新たな商業集積が形成されてにぎわう、いま注目のスポットである。その一面に今年一月、印章、ゴム印、シヤチハタ印などハンコの製造小売を行う(有)オザキ「野々市印房」(尾崎利正代表)はオープンした。同町本町三丁目と昭和四十七年から営業してきた当社にとって三十五年目の大きな決断だった。

決断を促した要因
尾崎代表の決断には、いく



真っ白の3階建の壁面に篆書体で「印」の文字が印象的な新店

つかの要因がある。

第一に「役場移転」がある。旧店のあった本町三丁目界隈は、古くは北国街道の宿場町として栄え、創業時は多くの商店が軒を並べ、町役場も近く、人やクルマの往来も盛んだったが、車社会の進展に伴い、大型駐車場を備えた郊外大型店などへの買い物場所の移転、街なかを迂回する道路整備など、立地環境が年々変化し、活気が失われていった。そして、町役場の移転は、今回の決断を決定的にさせた。

第二に「後継者の存在」がある。現在、当社には、長男の昌也さん、次男の尚也さんの二人が従事し、事業の中枢を担っている。多くの商工会員企業が事業承継問題に悩む中で、二人のご子息の経営参画は心強く、明日の成長意欲を勢いづかせるものだろう。

第三に、新たな事業の柱「シヤチハタ印の自社製造」がある。六年前、シヤチハタ(株)から、全国百台限定で、シヤチハタ印の製造プラント発

売が発表された。発表当初から、県内同業者の誰が取り組むかと注視したが、一向にその気配は見えず、思い切った取りんだ。県内唯一のシヤチハタ印製造業者である。通常、オリジナルのシヤチハタ印を注文すると、本社に製造を依頼するため、十日程度の納期を要するが、当社に注文すれば三日程度で納品できる。新店オープン後は毎日のように新しい注文が入り、新たな事業の柱として成長が期待される。

県内唯一の シヤチハタ印製造業者

日本ではハンコの原材料として、栢、水牛の角、象牙などが使用され、最近では石やアクリルなども扱われるようになってきているが、大半は精密機械を使った機械彫りである。シヤチハタ印などはレーザーで加工されている。製版はコンピュータ化が進んでいる。進取の気性に富み「三十五



左から次男の尚也さん、利正代表、長男の昌也さん、代表夫人の喜久子さん

年の商売は設備投資の歴史でもあった」という尾崎代表は、いち早く機械化に取り組んでいる。平成五年に初めてパソコンを導入し、製版作業に使用。いまでは複数台のパソコンが稼働しているが、最初に導入されたパソコンはいまも健在で、導入当初から当社で製作する印鑑の全ての版を記録、十三年余りで五万件のデータを蓄積し、同社の隠れた財産でもある。

新たな事業の仕組みを 確立して次なる成長へ

他業界同様、印鑑業界も通信販売、ネット販売などの新業態の出現、百円ショップ、ホームセンターなど他業種の参入で価格競争が激化しているが、尾崎代表は、価格のみに価値を求め風潮を自分の仕事をおとしめることと嫌う。また、「お客様とのやりとりが楽しい」のに、「もし価格だけの商売になれば、お客様に構っていらなくなる」と話す。さらに、目の前の売上を追って、適正な利益を確保できなければ、明日の投資がでさず、将来の事業存続を危うくする恐れもある。

新店は旧店時代と見違える好立地で、フリーの来店客も多い。個々のお客様の注文を伺い、丁寧な仕事で、価値ある商品を作り、納得して買っていただくという理想はこの店でこそ、やる価値があると考える。

ただ、「三十五年の経験が新



明るい接客スペース

店ではなかなか参考にならない」とも話す尾崎代表。新店の事業の仕組みはまだ不足が多いと感じており、急激な事業展開には慎重な様子だ。一人ひとりのお客様の注文に応じて納得していただける商品を安定した品質、コスト、納期で提供する仕組みの確立に一年はかかると考えている。真新しい新店の店先には、旧店で二十五年間使用されてきたという、古びた看板がまだ置かれている。この看板が新調されるのは、新たな事業の仕組みが整い、尾崎代表が当社の新事業展開を本格化させることを決断した時である。(お問い合わせ)

(有)オザキ 野々市印房

営業時間…八時半～二〇時
定休日…毎月最終日曜日
〒九二一-八八二五
野々市町三納二四街区二七
(町役場隣り)

TEL〇七六一-四八四六三三

このコーナーでは石川の「チャレンジ企業」を応援しています。取材を希望される方は最寄りの商工会にお尋ねください。